

### 特集 真福寺大須文庫蔵『法華論』(鎌倉写本)

真福寺蔵『法華論』の紹介と史料的价值／浅野 学

真福寺蔵『法華論』は天平勝宝七年の訓点を伝えるか／中野 直樹

#### 《古写経紹介》

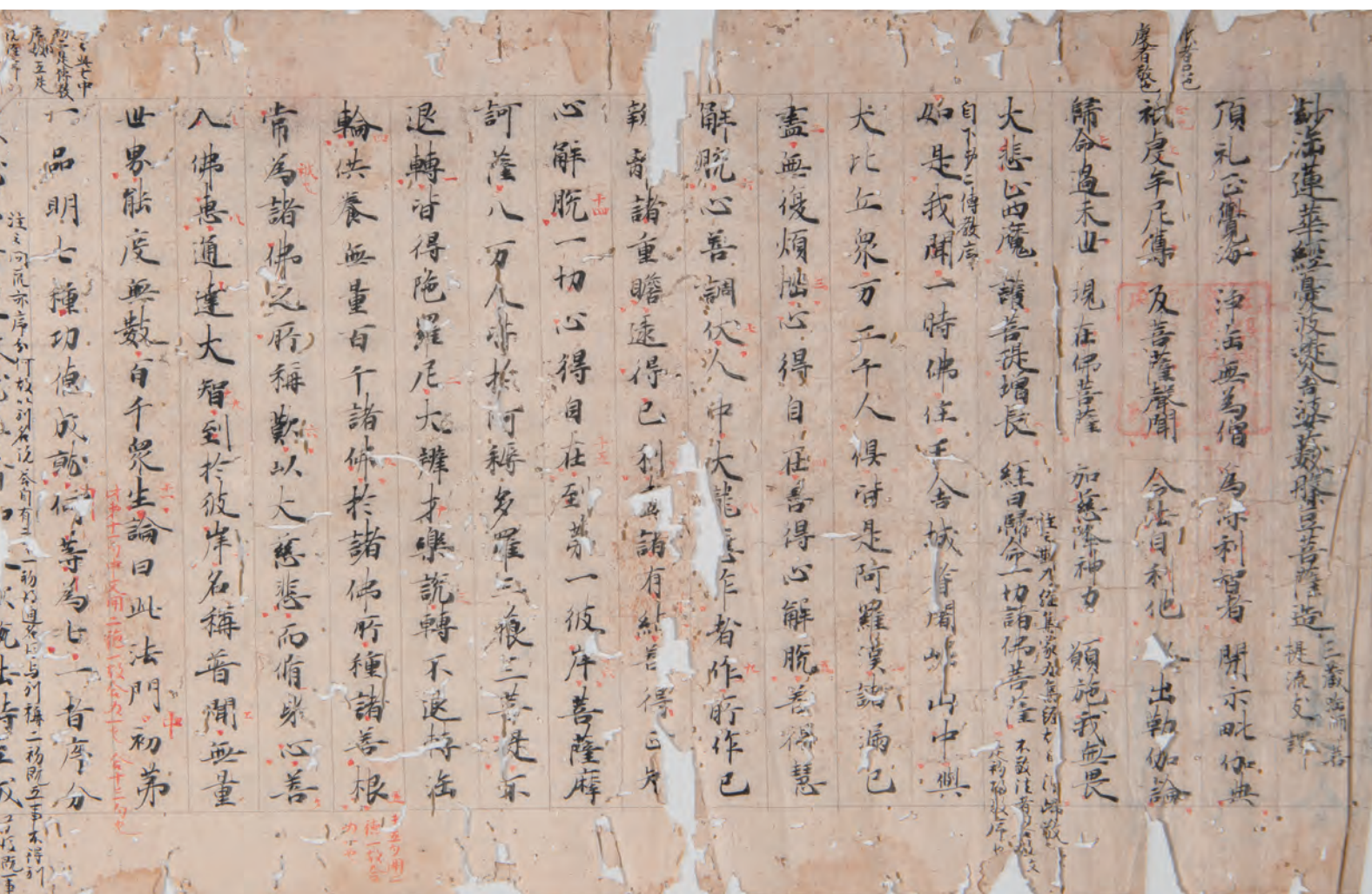
石山寺蔵靖邁撰『仏地経論疏』について／長谷川 岳史

五島美術館蔵『注金剛般若経』／落合 俊典

#### 《TOPIC》

版本大蔵経と智洞、そして順藝／万波 寿子

親鸞の参照した一切経／深見 慧隆





## 安世高から一遍・円測・常騰へ

落合 俊典

古写経の研究に長年従事していると、時折思わぬ展開に眼が眩むことがある。相当昔のことになるが、安世高（一八六）の失われた漢訳經典が十三世紀の鎌倉写経に残っているのではないかと、梶浦晋氏からの問い合わせであった。その『十二門経』とやらは隋の仁寿二年（六〇二）に編集された経録（『仁寿録』巻五）に欠本とされていたものである。そのような書物を確認する手立ては引用文との照合以外に手段はないが、幸い都超（三三六―三七八）の『奉法要』（弘明集）巻十三に「十二門経云く、有る時自ら計（かんが）えるに我は端正にして好し。すなわちまさに自ら念ずるに身中に（端正好）有るところなし。ただ肝臓・腸・胃・肺・骨・血・屎・溺あるのみ。何等を好有るとなすや。また他人の身中を觀るに、惡露みな是の如し。」（『大正藏』五二卷八七頁下段）とあってほぼ一致したのであった。これは安世高訳『安般守意経』の後半に付加されていたものが誰も気付かずに転写されて天野山金剛寺の一切経に所蔵されるに至ったと推定される

\* \*

金剛寺と言えば書名未詳の和綴じ本が出てきた時にも頭の中がグルグル回った。仮に『念仏要文抄』（金剛寺聖教二八―四五）と命名したが、ここに「踊念仏和讃」なるものが入っていた。和讃には馴染みが薄く、また少しく誤写も見えたのですんなり読むまで時間を要したが、ほぼ解析できた利那にはこの和讃の表現が蝶の舞うように飛翔するのを禁じえなかった。

『一遍聖絵』に天台僧の難詰に

はねばはねよおどらばをどれ

はるこまののりのみちをばしる人ぞしる  
とあるが、こちらの「踊念仏和讃」には相い通じる表現として

仏とる道しらずとも 教えのままにとなうべし  
知て仏とる人は 仏をしるといはぬかな  
知らで仏をとる人ぞ 仏を知るにあらぬかな

（中略）

歓喜踊躍の心にて 踊れや踊れ小兒ども

聖の教えにしたがいて 次第とれとれ小兒ども  
このように分かりやすい和讃の唱導に依って踊念仏が流行したと考えられる。一遍は同語反復を重層させながら浄土教の神髄に迫ろうとする表現が多いが、まさにこの和讃はその的を射ていると言っても過言でない。

\* \*

つぎに尾張徳川藩に伝来した古写経『神通論』一卷が徳川美術館に所蔵されていたが、判読し難い文献であった。依頼されて何とか読み解くと新羅の学僧円測（六一三―六九六）の著述と分かった。この話題を耳にした韓国の書誌学会の会長が異常と思えるほどの関心を持ち写真を懇願所望してソウル金浦空港まで追いかけてきたことがあった。何故なら当時発掘された光州の寺院遺跡から発見された木簡等の文字資料と近似していたからだという。美術館の許しを得ていないのでお断りすると何度も写真に穴が開くほど見つめていたのにはほとほと困った。

\* \*

また、新型コロナの第七波が静まりかけた頃、古写研のリサーチアシスタントの浅野学君が真福寺善

本目録に『法華論』が載っていると報告してきた。黒板目録を繙いて驚かずにはいられなかった。元奥書の「天平勝宝七歳」（七五五）云々という記載が地響きのように轟いたのである。小田原の聖「経源」（一一一―一三）の移点記録もあり、書写者は「慶玄」で元久二年（一一〇五）四月のことだという。すぐさま鳥居和之大須文庫長にお願いして閲覧すると、表にも裏にも書名未詳本からの写し書き（「移導」）が緻密にしかも山のように夥しく書き込まれていた。その書の素性を突き止めようと何日も苦勞していたが、手掛かりが韓国東国大学の金天鶴教授の論文にあった。奈良の博物館で「大安寺展」を見に行く予定が迫り、新幹線の中でも調べていたところ乗換駅直前で書名（逸書『法華論注』三卷）が判明した。しかもその人物は大安寺僧であり、後に梵釈寺別当と崇福寺検校を兼ねた常騰（七四〇―八一五）である。「大安寺展」は殊の外、感慨深い展観となったのは言うまでもない。さらに執筆した「慶玄」を調べると真言律僧叡尊（一一〇一―一二九〇）の父という。合点が行くとはまさにこのことである。この父にしてこの子あり、この子にしてこの父あり、と。学僧叡尊の自伝『感身学正記』や著述を見ると細部まで実に丁寧に推敲し、綿密な考証を経て自誓授戒の戒律復興を高唱した人物の姿勢が目当たり浮かぶ。

この真福寺本『法華論』については中野直樹氏と浅野学君から論考が寄せられたので特集とした。是非一読して古写経の種々相を味わって欲しいと願っている。

（国際仏教学大学院大学教授・日本古写経研究所所長）



## 目 次

### 《巻頭言》

安世高から一遍・円測・常騰へ	落合 俊典 (1)
----------------	-----------

### 特集 真福寺大須文庫蔵『法華論』(鎌倉写本)

真福寺蔵『法華論』の紹介と史料的价值	浅野 学 (3)
真福寺蔵『法華論』は天平勝宝七年の訓点を伝えるか	中野 直樹 (5)

### 《古写経紹介》

石山寺蔵靖邁撰『仏地経論疏』について	長谷川 岳史 (7)
五島美術館蔵『注金剛般若経』	落合 俊典 (8)

### 《TOPIC》

版本大蔵経と智洞、そして順藝	万波 寿子 (9)
親鸞の参照した一切経	深見 慧隆 (10)

既刊書・スタッフ紹介	(11)
------------	------

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。



# 真福寺大須文庫蔵『法華論』(鎌倉写本)

## 真福寺蔵『法華論』の紹介と史料的价值

浅野 学

北野山真福寺宝生院は名古屋市中区大須にある真言宗智山派の別格本山で、一般に大須観音と称されている。真福寺の経蔵である大須文庫には、国宝や重要文化財などを含む貴重な古典籍が多数所蔵されており、その総数はおよそ一万五千巻に達するという。

以前から日本古写経本の『法華論』(『妙法蓮華経憂波提舍』)の調査を行っていた筆者は、その過程で大須文庫に菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』一卷本(以下、真福寺写本)が所蔵されていることを知り得た。この真福寺写本は、黒板勝美編『真福寺善本目録』続輯(六頁)及び智山伝法院編『真福寺文庫撮影目録』下巻(五二五～五二六頁)によって既にその存在が伝えられていたが、これまであまり注目されてこなかった。

そのような中、幸いにも筆者は日本古写経研究所長落合俊典先生のご厚意に預かり、二〇二二年四月二十二日に第一回目となる大須文庫実地調査の機会を賜った。当日は大須文庫長鳥居和之先生の監督のもと、落合俊典先生、前島信也先生、中野直樹先生とご一緒に調査をさせて頂いた。

\*

\*

真福寺写本の特徴で特筆すべきこととしては、全篇にわたって付されている朱筆の訓点と、本文に対する注釈と見られる膨大な書き入れとの二つが挙げられる。本史料の朱点に関する考察は、中野直樹先生の論考「真福寺蔵『法華論』は天平勝宝七年の訓点を伝えるか」(本誌五～六頁)を参照されたい。

書き入れは、細かな筆によって上下欄外や本文の傍、また紙背にも記されており、本書が当時熱心に研鑽されていた様子が伺える。その内容について調べると、唐代法相宗の基『妙法蓮華経玄賛』からの引用が頻繁になされていることがわかった。他に「注云…」の形で記される書き入れもよく見られるが、これが如何なる性格の注記であるのかは今のところ不明である。

\*

\*

本文の「為説雲雨譬喻應知」(第二十四紙)という記述の紙背には「此譬有三。一草木譬即顯本性差別。二雲雨譬即顯□(判読不能。「理」の異体字か)教一味。三受潤即顯成行差別教。雖平等本性差別。性差別故受教成行(以下略)」という書き入れがある。この書き入れに関し

ては、最初に落合俊典先生が金天鶴先生の論文「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について」(二五九頁)で一致箇所を発見されたことを受けて、筆者も検討を行なった。

金天鶴先生は当該箇所について、湛叡『華嚴五教章算釈』で引用する『法華論常騰注』(以下、『法華論注』。現在散逸)が、円弘『妙法蓮華経論子注』(以下、『子注』)とパラレルであることを指摘している。この箇所と真福寺写本の書き入れとを比較してみると「法華論常騰注中巻云。此譬有三。一草木譬即顯能受之因。二雲雨譬即顯所稟之教。三受潤譬即顯受以成行之。即種子有二種。一本性住種子。二習所成種子(以下略)」と、傍線部で示した箇所が一致する。『法華論注』と『子注』とがパラレルであることに比べると、真福寺写本の書き入れはパラレルではないものの、このような一致が見られた。この書き入れが、『法華論注』『子注』からの影響を受けている可能性については、更なる検討が必要であろう。

\*

\*

『いにくら』第十一号(六頁)でも紹介した、金炳坤先生による『法華論』諸本の分類法に従って、真福寺写本のテキスト系統を検討したところ、真福寺写本は興聖寺本や七寺本などの日本古写経本とも異なる、独自の形を有するテキストであることが新たにわかった。真福寺写本の巻首には帰敬頌と帰命頌とがあり、序品に「自此以下示現所説法因果相應知」、方便品にも「自此已下示現所説法因果相應知」とある。そのため

真福寺写本は、先の分類法で区分される五種の内には収まらないテキストに当る。

\* \*

真福寺写本の巻末を見ると、本奥書には「點本云天平勝寶七年歲次<sup>乙未</sup>年三月廿七日僧定觀師／治曆四年<sup>甲戌</sup>二月廿六日小田原山寺迎接房移點已畢飯名比丘經源」とある。この記述からわかることは、経源が天平勝寶七年（七五五）の年記及び定觀（出自不詳）の記名を有する『法華論』に付されていた訓点を、治曆四年（一〇六八）までに、或る『法華論』（底本不明）に移点したということである。また書写奥書には「元久二年四月廿一日於菩提山慈恩院移點畢／（願文）僧慶玄」とある。併せて考えられることは、経源によって移点が施された『法華論』を底本として、慶玄が元久二年（一二〇五）までに、本文及び訓点を転写した写本が、今に伝わる真福寺写本ではないかということである。加えて傍書には「同十五日一交了／同年七月十（虫損。二或いは三）か」日辰時於同處移點畢」とある。ここでいう「移點」とは、本史料の特徴からも、おそらく或るテキストから注釈を移し記したことを意味する用語かと思われる。

\* \*

先の本奥書に記される天平勝寶七年本について、実は筆者には同じ年記を有するテキストに心当たりがあった。大正六年（一九一七）六月発行の『日本大蔵經編纂會会報』第二十三号に掲載される円珍『法華論記』の解題では「又此の後魏譯にも藏經本と單行本との二本我邦に流傳せるが、明治四十二年八月の交、東本願寺事務總長石川舜台老師より天平勝寶七年の願經を借覽して對校せしに、單行本遙に優れ居るを以て、此單行本に藏經本の差異を傍書して記に會合し、以て閱覽の便を計りたり」（二頁上）という記述がある。日本大蔵

經本『論記』の校訂者は、『法華論』を会合する際に、石川舜台老師から借りた天平勝寶七年本を、藏經本及び單行本と對校したと述べている。これは今から凡そ百数十年ほど前の話であるが、その天平勝寶七年本が現在どこに行ってしまったのかはわかっていない。天平勝寶七年本は、年記の一致から真福寺本の底本であった可能性もある。

二〇二二年七月一日に実施した第二回目の大須文庫実地調査で一緒に緒した万波寿子先生からは、真宗大谷派石川舜台老師所縁の寺院が石川県や富山県にあるというのを教えていただいた。それらの寺院には、石川舜台老師の藏書が保存されている可能性がある。天平勝寶七年本もそこにあるかもしれない。

\* \*

先述の通り、朱点、書き入れ、本文の系統など独自の特徴を有する真福寺写本の史料価値は極めて高い。さらに、もし天平勝寶七年本が発見されれば、真福寺写本との関係性が明らかになるであろう。今後の探查

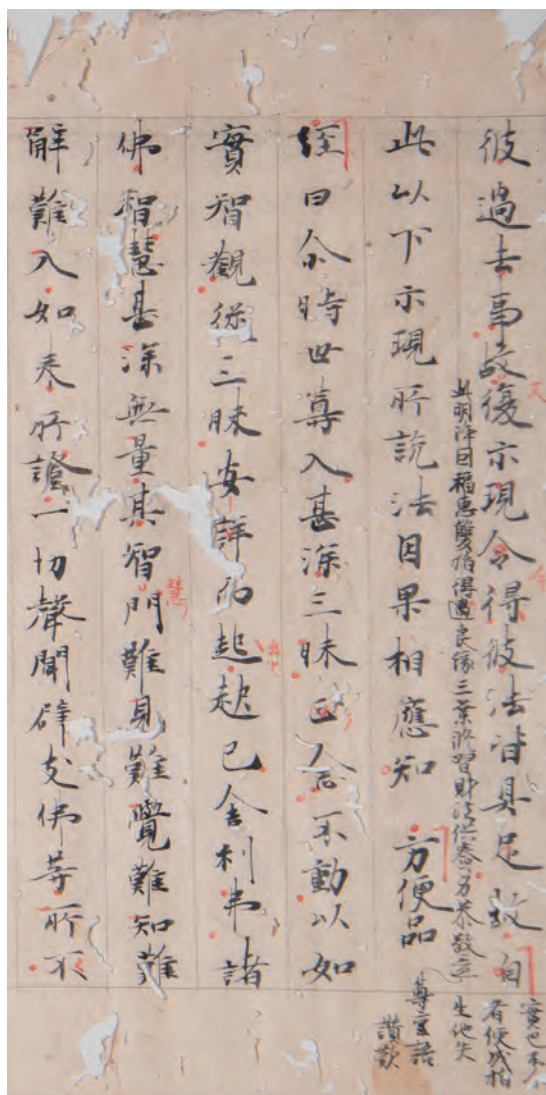
に期待したい。（本学大学院生）

（1）『元亨釈書』卷第十一には「釋經源。洛京人也。居興福寺。學相宗。移住小田原練若。修密法」。『大日本仏教全書』第一〇一冊、二七三頁上とある。

（2）『律苑僧宝伝』卷第十二の興正菩薩傳には「考姓源。後爲僧號慶玄」。『大日本仏教全書』第一〇五冊、二五八頁上とあり、觀尊（一二〇一—一二九〇年）の父（考）は亡父の意が慶玄という名の僧であったことを伝えている。年代的にも真福寺本を書写した人物は、觀尊の父の慶玄である可能性が高い。

#### 【参考文献】

- 黒板勝美編『真福寺善本目録』続輯、一九三六年  
智山伝法院編『真福寺文庫撮影目録』下巻、一九九八年  
金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華經論子注』について」『印仏研』第六〇巻第二号、二〇二二年  
金炳坤「流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として―」『妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』二〇二〇年  
拙稿「興聖寺本『法華論』のいとくら」第一号、二〇二二年  
日本大蔵經編纂會編『日本大蔵經編纂會会報』第二十三号、一九一七年



真福寺写本 第十二紙

【書誌】卷子本／十三世紀初頭書写／全三十一紙／  
一紙二十四行前後／一行十七字前後／虫損あり





本書のヲコト点には中央に強調の助詞として「イ」と読ませる点があったり(図3参照)、「者」字をヒトと読ませたりする訓が存する。これらは一般に古い読みとされ、本書には平安初期頃の古形が残っていることは確かである。しかし、これらは古形を残す資料には平安中期以降の加点においても見られるものであり、それが天平勝宝七年の訓点の残存例と判断すべき証拠にはならない。従って、本書は古形を含む治暦年間頃の喜多院点資料(鎌倉初期移点)と見るのが穏当かと思われる。但し、鎌倉初期に移点された際の訓点の改変は考える必要がある。

\* \*

本書の奥書には定馥・経源・慶玄の僧名が見える。三名のうち、定馥は未勘だが残る二名は法相宗関係の僧と考えら

れる(本稿注①・②)。小田原山寺は浄瑠璃寺、菩提山慈恩院は正暦寺を指す。小田原寺は、久安六年(一一五〇)に興福寺一乗院の祈願所となっており(『望月仏教大辞典』)、それ以前から法相宗との関りがあったものと思われる(築島(一九九六、四二三頁)も参照)。正暦寺は興福寺別当であった信円が再建に関わるなど、興福寺と関係があった(大原弘信・大原真弓(一九九二、三七頁))。これらからすると本書に法相宗所用の喜多院点が加点されていることは先行研究でも指摘されているとおり自然である。

本資料は、鎌倉初期の『法華論』の読みを教えてくれる大変貴重な資料である。未だ調査の及ばない点も多いが、そのほかについては稿を改めたい。

#### 【参考文献】

大原弘信・大原真弓「正暦寺一千年の歴史」「正暦寺一千年の歴史」(正暦寺、一九九二)  
塚本善隆(編纂代表)『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行協会、一九九四)  
築島裕『平安時代訓点本論考(ヲコト点図 仮名字体表)』(汲古書院、一九八六)

——『平安時代訓点本論考(研究篇)』(汲古書院、一九九六)  
中田祝夫「古点本の国語学的研究(総論篇)」(大日本雄弁会講談社、一九五四)

奈良国立文化財研究所編『西大寺観尊伝記集成』(大谷出版社、一九五六)

鷲尾順敬「増訂 日本仏家人名辞書」(東京美術、一九八六、増訂新装版)

#### 【付記】

資料閲覧に際して真福寺当局より御高配を賜りました。記して感謝申し上げます。  
(常葉大学短期大学部 専任講師)

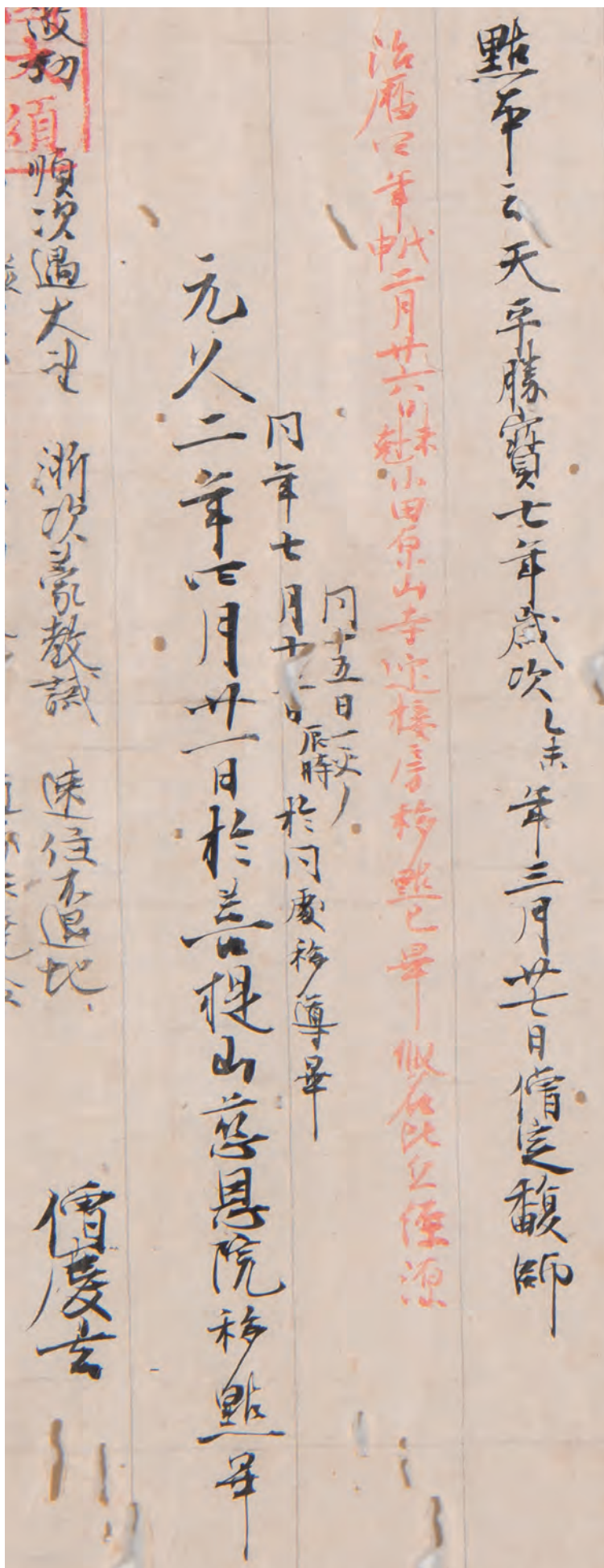


図5 本書奥書



## 靖邁撰『仏地経論疏』について

長谷川 岳史

玄奘（六〇二―六六四）訳親光菩薩等造『仏地経論』

（六四九年十一月二十四日訳出は、玄奘訳『仏地経』（六四五年七月十五日訳出）の注釈であるが、諸師の学説を合糅し親光の説を正義としつつ、玄奘自らの教学も反映させるべく編纂的に翻訳された。玄奘は後に同様の手法で護法等菩薩造『成唯識論』（六五九年閏十月訳出）を訳出し、自らの教学を完成させた。そのため『成唯識論』の数多くの論疏は盛んに研究されたが、『仏地経論』の論疏はその所在も含め注目されてこなかった。

『大唐大慈恩寺三藏法師伝』において九人の綴文大徳の一人にあげられ、ほかにも『瑜伽師地論』の証文や『成唯識論』の質文を玄奘指揮下で担当した靖邁（生没年不詳）の著作は、ほとんどが散逸したと考えられている。ここで紹介する『仏地経論疏』も靖邁に関する近年の研究においては所在不明の文献と見なされていた。

\*

\*

しかしこの書について、大屋徳城氏が『石山写経選』（便利堂、一九二四）のなかで、法宝（六二七頃―七〇六・七一〇頃）『一乗仏性究竟論』とともに巻一・二・六が石山寺に存在することを報告している。

この大屋氏の指摘の後にも、石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 一切経篇』（法蔵館、一九七八）、同『石山寺古経聚英』（法蔵館、一九八五）の両書において、「石山寺一切経」（附第六函「第一六〇号（巻一）」「第一六一号（巻二）」「第一六二号（巻六）」に平安時代初期の写本として現存することが報告されている。

\*

\*

そこで『仏地経論疏』巻一・二・六の写本閲覧と翻刻許可を願い出たところ、二〇一九年七月二十七日に写本閲覧の貴重な機会に恵まれた。その後、大本山石山寺、石山寺文化財総合調査団、奈良文化財研究所のご尽力で複写・翻刻の許可を賜った。また同時期に『仏地経論疏』の調査に入っていた落合俊典教授には研究連携のご縁をいただいた。

ここで『仏地経論疏』巻一・二・六の書誌情報を示すと以下ようになる。

## 「巻一」

体裁…卷子本

表題…仏地経論疏卷第一（外題箋）

首題…仏地経論疏卷第一

尾題…仏地経論疏卷第一

法量…縦二十七・五糎、横（原表紙は七・六糎、第一紙から第二十九紙は五十一・五十二・五糎、第三十紙は三十七・八糎）、行数二十八行内外、字数二十五字内外。

紙数…三十一紙（原表紙と本文三十紙）。ただし第四紙は横三十五・七糎と横十六・四センチのところに継目あり。

料紙…穀紙

界線…淡墨界、界高二三・二糎、界幅二・〇糎程度

備考…朱筆（一部、墨筆）にて合点・句切点あり。尾題

下に朱筆にて「信第一了」

注釈対象…玄奘訳『仏地経論』巻一

## 「巻二」

体裁…卷子本

表題…仏地経論疏第二（外題箋）

首題…なし

尾題…仏地経論疏卷第二

法量…縦二十七・五糎、横（原表紙なし、第一紙から第二十七紙は五十二・五糎（ただし第十八紙

は四十八・七糎）、第二十八紙は四十三・三糎）、行数二十八行内外、字数二十五字内外

紙数…二十八紙

料紙…穀紙

界線…淡墨界、界高二三・二糎、界幅二・〇糎程度

備考…朱筆（一部、墨筆）にて合点・句切点あり。巻末に弥勒十願の偈あり。

注釈対象…玄奘訳『仏地経論』巻二

## 「巻六」

体裁…卷子本

表題…仏地経論疏卷六（外題箋）

首題…仏地経論疏卷第六

尾題…仏地経論疏卷第六

法量…縦二十七・五糎、横（原表紙は二十一・一糎、第一紙から第二十三紙は五十二・五十一・九糎、第二十四紙は四十七・四糎、第二十五紙は四十七・三糎）、行数二十八行内外、字数二十五字内外

紙数…二十六紙（原表紙と本文二十五紙）。

料紙…穀紙

界線…淡墨界、界高二三・二糎、界幅二・〇糎程度

備考…朱筆（一部、墨筆）にて合点・句切点あり。巻末に回向偈あり。

注釈対象…玄奘訳『仏地経論』巻六末（巻七

このうち巻一尾題下の「信第一了」（日本古写経研究所令和四年度第一回公開研究会において赤尾栄慶先生より修正案をご提示いただいた）など、再検討を要する箇所は残されているが、すでに龍谷大学世界仏教文化研究センターの大蔵経研究プロジェクト「中国仏教教学の研究」の構成員（長谷川・小野嶋祥雄・村上明也・吉田慈順）が翻刻を発表し、出版の準備に取りかかっている。

なお『仏地経論疏』の翻刻研究の成果や現時点で抽出している教学的特色については、『日本古写経研究所研究紀要』第八号に寄稿した論文にまとめてあるので、そちらをご覧ください。（龍谷大学教授）



## 『注金剛般若経』

落合 俊典

五島美術館の『注金剛般若経』は巻首を欠く日本の古写経であるが、館に入る前は天平写経とされていた。川瀬一馬先生はその見解を正して「極平安初期」とされた。今仮に八〇〇年前後の日本古写経とする

と成立年代や著者などはどうなるであろうか。  
書写年代は川瀬一馬説に従うが、成立は何時になるか見ていきたい。本文には鳩摩羅什訳『金剛般若経』に対して細字双注として約五千字の注が施されている。それら全体の特徴は

1 六朝期の注釈書（慧浄注等）を参照しながら唐代の地婆訶羅訳『金剛般若経破取着不壞仮名論』（六八三年訳）を基軸としている。

2 経本文に冥司偈六二文字が見えないことから八二二年以前の成立と想定される。

3 目録類から著者を特定することが困難である。

4 後代の『金剛般若経』注釈書等には引用された足跡が認められない。

5 巻末に付されている願文（此経第一義 非愚所能曉聞之於智者 是故略解説 願以此功德 廣利諸群生 永斷衆迷執 速成無上道）は注釈者を推測する重要な手掛かりとなる。

\* \*

まず、注を施す上で既往の注釈書をベースにするとは常識的方法である。その点慧浄撰『金剛経註疏』三巻の引用参照は定石である。『注金剛般若経』の一大特徴はまさに地婆訶羅訳『金剛般若経破取着不壞

仮名論』に多々依拠している点である。例えば、五島美術館蔵本の四三五行には經典本文を注して、法性者如何。諸佛具丈夫相而證菩提。今釋此疑。

（法性とは如何。諸佛、丈夫相を具して菩提を證するなり。今、此の疑を釈す。）

とある箇所は、実は地婆訶羅訳文と文が相似している。

地婆訶羅訳『金剛般若波羅蜜經破取着不壞仮名論』（六八三訳）に

復次疑曰。若智亦不能知法性者。如何諸佛具丈夫相而證菩提。（『大正藏』二五・八九五下・一五）  
一六）

（宇井伯壽訳「二十一」復次に、疑うて曰く、若し智も亦法性を知ること能わずんば、如何が諸佛は丈夫相を具して而して菩提を證せんや。）

とある。注釈者は地婆訶羅訳本の「不能知法性者」の「不能知」を除いて「法性者如何」と大胆な換骨奪胎をして註している。この点問題が残るが、地婆訶羅訳本を参照していることは相違ないであろう。「今釋此疑」の意味するところは地婆訶羅訳本にある「復次疑曰」を解釈したのだという意味である。

次に、通常鳩摩羅什訳『金剛般若経』敦煌本の書写年代判定においては冥司偈の六二文字を用いる。本書には靈幽法師が長慶二年（八二二）、羅什訳『金剛般若経』經典本文に付加したという「冥司偈」が見られないのでそれ以前の写本と見なして相違ないとなるであろう。

三番目に、目録等から想定される著者を唐代に限定すると

- ① 褚亮撰『金剛般若経註』一卷（『東域伝灯目録』）。
- ② 玄範撰『註金剛般若経』一卷（『新唐書』『芸文志』四九、『大唐内典録』卷五）。
- ③ 道世撰『金剛経集註』三巻（『宋高僧伝』卷四）。
- ④ 王潔撰『金剛般若経註』一卷（『常曉和尚請来目録』

卷一）。

⑤ 韋宗卿『金剛経註』二巻（『義天録』卷一）。

⑥ 韋諗撰『金剛般若経註』一卷（七寺蔵『古聖教目録』）。

⑦ 牛頭山融和尚『同註』一卷（『東域伝灯目録』）。

などが挙げられる。詳しい検討は省くが、可能性として残るのは一般知識人（士大夫）の韋宗卿（八〇二）ただ一人となる。しかし、唐代の仏教研究盛んな中にあって、果たしてインド仏教の先端的研究を取り入れた『注金剛般若経』を撰述できるだろうか。疑問符が残る。

四番目では、後代つまり八世紀を含めて後代の『金剛般若経』注釈書には恐らく本書の引用は見られない。引用箇所が見られないことを詳説するのは困難である。

五番目として願文の意図するところは明確である。「此の経は第一義（諦）なり。愚（私）の能く曉らかにするとところに非ず。之を智者より聞けり。是の故に略ぼ解説するなり。願わくは此の功德を以て、広く諸々の群生を利し、永く衆（生）の迷執を断じて、速やかに無上道を成ぜんことを。」とある。智者とは誰であろうか。それは本経に明るい学僧であつたろう。願文にある「第一義」は中観仏教で主張される真俗二諦の真諦を示す語彙に他ならないが、恐らくは新思潮を取り入れた『金剛般若経』の注釈書を期したのである。

ところで七、八世紀の唐代にあって三論宗以外にインド中観派の新思潮を理解する集団は知られていない。してみると三論宗の誰かが関与したとなるが、七世紀頃から衰微していく三論宗の中にこの流れを受容する余裕が果たして存したのであろうか。今後の研究に俟ちたい。

（本学教授）



## 版本大藏経と智洞、そして順藝

万波寿子

天和元年（一六八二）、明の嘉興蔵大藏経を底本として、黄檗版大藏経が開版された。これは近世仏教にとって画期的な出来事だった。誰もが「大藏経を博捜し、参照・引用できるはじめての時代が来たのだ」。

もとより、黄檗版は底本である嘉興蔵に倣って冊子体で使いやすく、整版印刷に拠るためそのテキストだけでなく版式も不変だ。それまでの大藏経は基本的には卷子装か折本装で取り扱いが不便だった上、入手も困難であった。頒布された黄檗版の総数は江戸時代を通じて二〇〇〇蔵を越え、当時いよいよ隆盛となった町版（民間の出版物）の仏書出版の盛行ともあいまって、日本史上初めて、宗派や学問分野を越えて利用可能な近世仏教学の基盤が出現したのだった。

ここでは、この基盤で学び、そしてそれを超えようとした江戸中後期の学僧桃華坊智洞と、幕末の学僧丹山順藝を紹介したい。

\*

\*

桃華坊智洞（一七三六―一八〇五）は、江戸時代最大の宗教騒乱三業惑乱の責任者とされて獄死した人物として近世史に名を残している。しかしその裏で、彼は近世仏教学の上に極めてユニークな業績を残した。それが、天明三年（一七八三）成立『龍谷学叢内典現存目録』五巻だ。一見、単なる西本願寺檀林の蔵書目録なのだが、この本には智洞の思想が込められている。

その最大の特徴は、檀林の書庫とは別の場所に収められていた嘉興蔵が学林蔵書と混ぜられ（図一）、浄土



図一 『龍谷学叢内典現存目録』部分（龍谷大学大宮図書館所蔵）

教を中心とした配列に並び替えられていることにある。つまり彼が示したのは、日本人の著作を含め当時利用可能な仏書を独自に配置した、いわば総計四五七七部の新しい仏教体系であった。こうした発想は、現代の仏教学には見られないかも知れない。

\*

\*

今一人紹介するのは、東本願寺檀林の学僧丹山順藝（一七八五―一八四七）である。その学問の特徴は、抜群の学力で経文の文字を徹底的に突き詰め、原典を追求することであった。彼は窺基撰『金剛般若論会釈』

三巻の諸本を集め六校もしている。また当時不可侵の聖典とされた坂東本『教行信証』の復元も試みたと見られる。

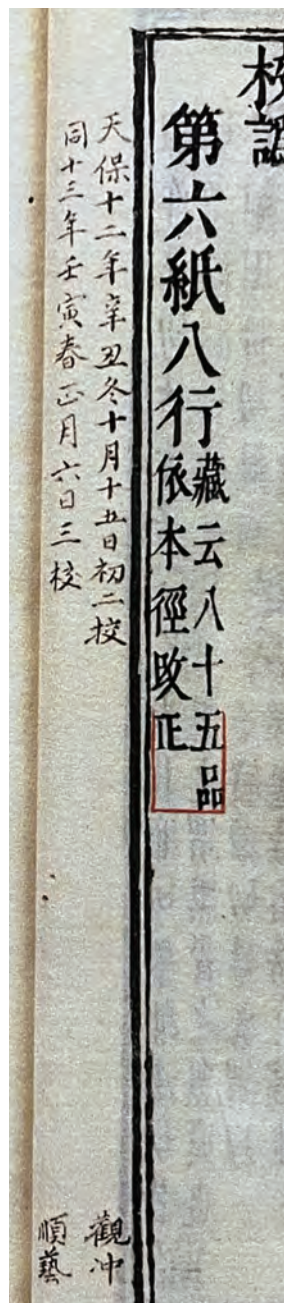
強い探究心を持った順藝は、既存の黄檗版に満足せず、当時最高の本文を持つとされた建仁寺の高麗版大藏経の閲覧を願い出る。不屈の情熱で建仁寺から許可を取り付け、檣蔵と対校すること三回に及んだ（図二）。江戸中期に同じ建仁寺高麗蔵を校合した忍微よりも文字を正確に写しており、順藝を手伝った僧香巖は「高麗寺一本建立せしか如」くであったと称賛している。

\*

\*

面白いことに、この順藝は自身の蔵書目録を作るにあたり、智洞の『龍谷学叢内典現存目録』の構成を採用している。智洞と順藝、この二人に共通するもの。それは彼らが卓越した学僧であったこと以外に、黄檗版大藏経（智洞の場合はその底本の嘉興蔵）や、あふれる町版仏書という基盤を足がかりに、さらに進化しようという近世仏教学独特の態度であると思う。智洞が提示したのは、嘉興蔵を内にとりこんでこそ初めて可能な仏教の大系である。順藝が試みたのは、既存の黄檗版のテキストに満足しない、より優れたテキストを徹底して追求しようという態度であった。

（鶴見大学 専任講師）



図二 順藝校訂『大般若経』部分（大谷大学図書館所蔵）



# 親鸞の参照した一切経

深見 慧隆

浄土真宗の開祖とされる親鸞（一一七三～一二六二）は数多くの著作や書写本を書き遺しているが、とりわけ生涯にわたって最も心血を注いだ書が『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）であるといわれている。『教行信証』には親鸞の自筆本が存在するが、その自筆本は坂東本とも呼ばれ、親鸞が関東在住時代に作成した草稿本を六十歳頃に転写した後、晩年の八十四、五歳頃まで加筆訂正を続けた書として知られている。

この『教行信証』は「文類」の題が示すように、内容の約八割が引用文で構成され、そこには約六十種類の仏典が多岐にわたって引用されている。そのため、『教行信証』の執筆を巡っては「どこでどのような仏典群を参照したのか」といった問題が議論されてきた。先行研究では親鸞の史実や伝承などから「関東在住時代に鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）や鎌倉明王院（神奈川県鎌倉市）などで宋版大藏經（思溪版）を参照した」という見解もあるが、直接的な証拠はなく、その実情は明らかとなっていない。この問題に関して検討すべきは、親鸞が実際に引用した仏典がどのような種類の仏典群で、いつ頃に参照したものなのか、ということである。

また、引用仏典の本文については文字の異同がところどころに存在することが古くから指摘され、様々な見解が提出されてきた。その異同に関しては、例えば①親鸞の誤写や誤認によるもの、②親鸞の意図的な改変によるもの、③親鸞の参照した底本によるもの、といった問題があるが、それらの多くは親鸞の参照した

宋版大藏經の影響によって生じたものと考えられている。

ただし、これらの研究は①誤植や誤記の問題がある『大正蔵』などの活字本が使用されている点、②親鸞が当時参照できたと考えられる仏典群に日本古写経が想定されていない点、③親鸞の書写時期や改訂跡が無視されている点が問題として挙げられる。特に③については、近年、親鸞の筆跡研究が進展したことにより、筆跡の変遷に応じて親鸞五十八～六十三歳頃の「前期筆跡」、親鸞七十～七十五歳頃の「中期筆跡」、親鸞八十歳以降の「後期筆跡」に大きく分類できることが明らかとなっている。そのため、親鸞が引用する際に依拠した仏典が時代ごとで種類が異なる可能性を考慮し、親鸞の引用仏典の本文を筆跡年代ごとに区分したうえで検討を行う必要がある。

こうした問題意識から、比較サンプルの多い『涅槃經』に注目した。『涅槃經』は『教行信証』以外にも、前期筆跡の『見聞集』や中期筆跡の『大般涅槃經要文』といった親鸞自筆本の中で数多く引用されており、親鸞の依拠したテキストを探る手がかりとなる。また、『教行信証』においても中期筆跡の貼り紙や後期筆跡の大幅な改訂がみられ、親鸞が執筆当初に依拠したテキストとは異なるものを用いて本文を改訂していたことが想定される。

\* \*

ここでは、親鸞自筆本の『涅槃經』引用文を筆跡年代ごとに分類したうえで、親鸞が当時参照することができたと考えられる『涅槃經』諸本の本文と比較検討を行った。その結果、前期筆跡の『見聞集』は日本古写経の南本『涅槃經』の本文と最も近しく、中期筆跡

の『大般涅槃經要文』は福州版の北本『涅槃經』の本文と最も近いことが明らかとなった。加えて、『教行信証』は前期筆跡箇所では日本古写経の南本『涅槃經』の本文に近しく、それ以降の改訂が見られる筆跡箇所では日本古写経の南本『涅槃經』だけでなく、福州版や思溪版の北本『涅槃經』を参照していることが判明した。

このことから親鸞は、日本に古くから伝わる南本『涅槃經』を主に受容していたが、年を重ねることに当時の最先端であった宋代の北本『涅槃經』を取り入れ、適宜『涅槃經』本文の検討を行っていたと考えられる。そして広い視点で考えるならば、『教行信証』は当時の日本仏教において、日本古写経から刊本大藏經へと展開していく過渡期の様相を呈した極めて貴重な書であるといえる。

（本学研究生）

	【前期筆跡】 五十八～六十三歳頃	【中期筆跡】 七十～七十五歳頃	【後期筆跡】 八十歳以降
『見聞集』	日本古写経の南本『涅槃經』に最も近い		
『大般涅槃經要文』		福州版の北本『涅槃經』に最も近い	
『教行信証』	日本古写経の南本『涅槃經』に最も近い	判断不可	福州版や思溪版の北本『涅槃經』の影響

親鸞における『涅槃經』諸本の受容過程



## 既刊書

### ○『いとくら』11号（非売品）

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学  
学術成果コレクション」上からダウンロードできま  
す。バックナンバーを希望される方は下記連絡先に  
お知らせ下さい。

### ○日本古寫經善本叢刊（非売品）

第1輯『玄應撰一切經音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏 觀無量壽經』

第4輯『集諸經禮懺儀卷下』

第5輯『書陵部藏 無量壽經記』

第6輯『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』

第7輯『國際佛教學大學院大學藏 金剛寺藏  
身延文庫藏 無量壽經述記』

第8輯『續高僧傳 卷四卷六』

第9輯『高僧傳 卷五』

第10輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第11輯『續高僧傳 卷二八卷二九卷三〇』

第12輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第13輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第14輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第15輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第16輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第17輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第18輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第19輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第20輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第21輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第22輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第23輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第24輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第25輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第26輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第27輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第28輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第29輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第30輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第31輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第32輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第33輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第34輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第35輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第36輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第37輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第38輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第39輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第40輯『法道寺藏天平写經 雄阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

## スタッフ紹介

### 研究所所長

落合俊典（本学教授・理事長）

### 研究所兼任研究員

藤井教公（本学教授・学長）

アレックス・フロリン（本学教授・本学附属図書館館長）

齊藤 明（本学教授・本学附属国際仏教学研究所所長）

福田裕美（本学教授）

池 麗梅（本学教授）

末木康弘（本学仏教書誌研究プロジェクト主任研究員）

齊藤達也（本学附属図書館副館長）

池田道浩（本学附属図書館員）

興津香織（本学附属図書館員）

信賀加奈子（本学附属図書館員）

堀伸一郎（本学附属国際仏教学研究所副所長）

### 特別研究員

赤尾栄慶（京都国立博物館名誉館員）

牧野和夫（実践女子大学研究推進機構研究員）

### 学内研究協力者

赤塚祐道（本学特任研究員）

青木佳伶（本学特任研究員）

### 研究員（PD）

前島信也

前島信也

本号の編輯担当

前島信也

前島信也

（令和5年3月現在）

## CONTENTS

Toshinori OCHIAI,	From An shigao to Ippen, Wōnch'uk, Joto	1
Manabu ASANO,	Introduction to the Osu-bunko stored the <i>Miaofa lianhua jing youbotishe</i> and its hystorical value	3
Naoki NAKANO,	Does the <i>Miaofa lianhua jing youbotishe</i> stored the Osu-bunko convey the Glosses written in 755 ?	5
Takeshi HASEGAWA,	About Jingmai's <i>Fodi jing lun shu</i> of Ishiyama-dera	7
Toshinori OCHIAI,	<i>Zhu jingang bore jing</i> stored in the Gotoh museum	8
Hisako MANNAMI,	Woodblock Print Canons, Chido and Jungei	9
Keiryu FUKAMI,	What kind of the collections of Buddhist Scriptures did Shinran refer ?	10
Introducing Previous Publication and current staff		15

国際仏教学大学院大学  
日本古寫經研究所ニュースレター

い と く ら 第12号

令和5年3月25日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学  
日本古寫經研究所  
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9  
URL <http://www.icabs.ac.jp>  
E-mail [nihonkoshakyo@icabs.ac.jp](mailto:nihonkoshakyo@icabs.ac.jp)

印刷 株式会社 高山

Newsletter of the Research Institute for the Study of Old  
Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures  
of the International College for Postgraduate Buddhist Studies

ITOKURA Vol.XII

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts  
of Buddhist Scriptures of the International College for  
Postgraduate Buddhist Studies  
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan  
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist  
Scriptures of the International College for Postgraduate  
Buddhist Studies 2023  
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo